

「環境」と「中庭プロジェクト」―柴田学園大学短期大学部における教材化の試み

柴田学園大学短期大学部 蝦名敦子

本稿は筆者が担当している柴田学園大学短期大学部での「環境の指導法」で、試験的に実践した「中庭プロジェクト」を取り上げ、その教材としての意義について、「環境」の視点から考察したものである。この「環境」の授業は、『幼稚園教育要領』（以下、『要領』と略す）に規定されている5領域の一つである「環境」に基づく。『要領』における「環境」と、題材として行った「中庭プロジェクト」（Part1「土に親しむ」、Part2「中庭をリメイク」）に関して、教材としての意義―授業効果や今後の課題について検討することが、本考察の目的である。

実践の結果、思いの外、自然に触れる活動が学生に受け入れられ、教育効果があった。またイメージを膨らませ、理想の庭を創り出すことに学生は集中力を発揮した。そこに改めて本題材の教育的意義と成果が認められる。

Part1では植物や土に触れ、手だけではなく足からも、硬いコンクリートの地面とは異なる、土の感触が得られた。土を掘り起こすと、自然の植物の根や生き物に気付く。普段意識していない様々な生物が生きていることに注目した。そしてさらにより良い場所となるように、彩や植生の配置など美しい環境を求めるようになった。

Part2ではその場をどのように作り変えたらよいか、積極的なリメイク表現に学生のイメージも高まりを見せた。現状を改善するための自由な発想を学生に求めたのであったが、中には卒業後の職業を意識し、幼児教育のための環境を考え工夫を凝らした者もいた。

学生が多く感想で述べていた言葉は、その成就感である。自分たちの労力を通して中庭が見違えるようにきれいになったこと、また製作においても試行錯誤することで、グループでイメージした理想の庭が完成したことに、達成感を覚えている。実際に手や体の身体感覚を使って土に触れ、また材料を駆使してイメージを自らの手で創り出したことに対する、触覚などの感覚を発揮させた満足感である。彼らが吐露した成就感や達成感、満足感は本教材の教育的有効性を裏付けていよう。

スマートフォンを常に持ち歩かなければならない日常となった今、この時代感覚に最もなじんでいる若者（短大生）が、土に触れることに新鮮さを覚え、好意的に且つ積極的に受け止めた。そのこと自体が、今回の実践成果である。また課題としては、今後はPart1のねらいをより明確にして、「土に親しむ」活動を計画的に授業の全体的組立ての中に位置付けることである。Part2では、現状を美的に改善するという目的に加えて、一部の学生が行ったように、幼児の教育環境をつくるという視点をより強調して、この課題に取り組んでみることである。さらに今後は鑑賞の段階で、スマートフォンの機能を利用した動画のプレゼンテーションなども、積極的に取り入れてみたい。